サンプル

　ぴちゃん。

　窓のない地下の部屋。

　ランプの明かりのみが部屋を妖しく照らしていた。

　浮かび上がる二人の姿。

「ねぇ、もっとちゃんと舐められないんですか？ 全然綺麗になってませんよ？」

　ベットの 腰かけながら足を組むメイド服を着た少女は口の端を緩かに上げながら小バカにした様に笑う。

　ぴちゃぴちゃぴちゃ。

　少女の言葉に怯えたように湿った音がさっきよりも激しくなった。

　それを見下ろしながら、少女はますます楽しげに笑い、

「まったく……ブーツ一つ綺麗に舐められないなんて、使えないペスですねぇ」

「申し訳ありません」

メイド服を着た少女のブーツを舐めさせられる幼い少年は赤い舌で媚びるようにただひたすら足を舐めるのだった。

◆

「ここが職場か……」

大きな洋館の前に立ち、緊張した声を漏らす少女はカーヤ。

ショートヘアの黒い髪はこの国では珍しく人目を引く。

だが、勝ち気な瞳と明るい雰囲気をしているカーヤはこの髪の色で苦労することはなかった。

むしろ、印象に残りやすいため、面接とかでは有利になる。

カーヤが採用された仕事は、聞いた話では家政婦の仕事。

屋敷の管理がメインであり、あとは家畜の躾が書かれていたのが印象的だ。

家畜の躾はしたことがないが、未経験者でも大丈夫と書かれていたことや、給金や福利厚生がよくて、ここに就職を決めたのだ。

「よし！」

ふん、と気合いを入れたカーヤは獅子を象ったノッカーを叩く。

「いらっしゃいませ、カヤさんですね？」

　扉が開かれると、紫色の髪をしたメイド服の女性が姿を見せた。

(やっぱりメイドだから、制服はメイド服なんだ)

「今日から採用になったカヤです。よろしくお願いいたします」

「私は奥様にこの屋敷の管理を任されているテレサと申します。よろしくお願いいたしますね」

　お辞儀するテレサの動作一つ一つが美しく、思わず見惚れてしまう。

「奥様が私を雇用して下さったんですよね？」

「えぇ。でも、今はこの屋敷にはいらっしゃらないので、奥様の身の回りのお世話などは私達はしません。私達の仕事は屋敷の掃除と家畜の躾ですね」

　テレサに屋敷の中に案内され、カヤは自分の与えられた部屋へと案内される。

　◆

　驚いた。

　与えられた部屋は大きく、屋根裏部屋ではなく、立派なベットとクローゼット。

　クローゼットにはメイド服がかけられている。

「うわ〜」

　使用人とは思えないいい部屋だった。

　正直、実家よりも大きい部屋だった。

「制服に着替えて下さいね。外で待ってますから」

「あ、はい」

　呆けていたカヤは慌てて服を着替えて外に出た。

「では、仕事の説明をしますね。一番大事な仕事である家畜の躾についてです」

　何故か不思議な笑みを浮かべたテレサに気圧されたカヤは思わず姿勢を出す。

「は、はい！」

（家畜の躾か……。庭とかには馬も犬もいなかったよね？ 種類も書かれてなかったし、危険な猛獣みたいなのかな？）

　金持ちには自慢するために異国の猛獣を飼ったりする貴族は一定数いる。

　他人にはないものをもつ、が一種のステータスだからだ。

「あの……その家畜って危険は……」

「大丈夫ですよ。危険はありませんなら」

（危険はない？　じゃ、希少な獣とかかな？）

　カヤの頭のなかでは小猿や小鳥のイメージが浮かぶ。

　確かにあれらなら部屋でも飼育できる。

　でも、部屋でかうにも変だよね？

「こっちよ」

　何故か案内されたのは緩やかな勾配を描く下り坂になった……地下室へと繋がる通路だった。